

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第28号 2021年3月

〈居場所〉を増やす

— 地方都市における市民社会実践からの一考察 —

Increasing Places for Inclusion

— A Study from Civil Society Practices in Local Cities —

滝口 克典 | KATSUNORI Takiguchi

---

# 〈居場所〉を増やす

— 地方都市における市民社会実践からの一考察 —

Increasing Places for Inclusion

— A Study from Civil Society Practices in Local Cities —

滝口 克典 | KATSUNORI Takiguchi

---

The purpose of this study is to clarify how civil society organizations are increasing the place for social inclusion in the area. This issue was addressed based on the case of "Plat home" (Yamagata City, 2003-19), which is a practice of "making a place" in a local city. As a result, it became clear that they increased the "place for inclusion" in the following ways: In the local area where resources and opportunities for support are scarce, reading "places for inclusion" in the various things, spaces, and histories of the area and interpreting them as "places for us." In this way, many different "places" were achieved. This is another path to "right to the city," which is different from what capital does in the form of a consumer society.

Keywords:

居場所づくり 地方都市 市民社会 都市への権利

making a place local city civil society right to the city

---

〈居場所〉<sup>1</sup>を増やす

— 地方都市における市民社会実践からの一考察

---

## 1. はじめに

---

〈居場所づくり〉なる実践が活況を呈している(御旅屋 2015)。もともとそれは、1980年代より「不登校の子どもたち」を主な対象に営まれてきた支援実践であり、学校や家庭に〈居場所〉を見出せなくなった子どもたちに安心・安全かつ自由に居ることができる場所を供給するべく、物理的かつ社会的に空間を確保し、そこを彼(女)らのために開けておくというものである。

2000年代以後には、そうした支援の方法論が、「不登校」のみならず、社会・地域に〈居場所〉を見出しづらさまざまなカテゴリーの人びとに拡大適応されるようになっていく。その結果、現在では、子どもから高齢者、障がいをもつ人びとから気晴らしを求める社員に至るまで、〈居場所づくり〉の遍在とでも呼びうるような状況が生まれているのである。

なぜかような事態が生じているのであろうか。さまざまな説明が可能であろうが、ここでは、それを必要とする人びとの側の事情から考えてみたい。そもそも〈居場所〉とは、それが「ある」と感じられているときには意識にのぼることがなく、なくなっちはじめてその不在とともに意識化される概念でありカテゴリーである。

つまり、当たり前なようだが、〈居場所〉を求める多様なカテゴリーの人びとに共通しているのは、その〈居場所のなさ〉だということになる。この〈居場所のなさ〉とは、通常そう

---

理解されることが多いような心理的な〈居場所のなさ〉であるとともに、時間的・空間的に正統に身をおくことのできる場が物理的かつ社会的にない、ということでもある。

どういうことか。例えば、「ひきこもり」を例に考えてみよう。ひきこもっているというのは、そうした〈居場所のなさ〉の代表的なありようである。現代日本にあって、「ひきこもり」は、1990年代後半に若者の問題として「発見」され(斎藤1998、石川2007、荻野・川北・工藤・高山2008)、その後それが長期化・遷延化していくことで、2020年現在、「8050問題」のような中高年問題(池上2019、川北2019、藤田2019、斎藤2020)へと再編されつつある。

この再編にはもうひとつの側面がある。それは、「こころの問題」から「労働・生活の問題」へ、という認識の転換である(石川2016)。背景にあるのは、1990年代半ば以降の労働環境の劣悪化だ。非正規雇用の拡大(熊沢2006; 2007、北川・古賀・澤路2017)や「ブラック企業」の蔓延(今野2012; 2015、熊沢2018)などが典型だが、それにより、職場にとどまり働き続けることが困難な人びとが大量に生まれていく。職場からの排除である。

職場からの排除は、職場からのみの排除ではない。彼(女)は、平日日中に居られる場所を失ってしまったのであり、それは、現在の日本社会においてはスティグマ(不名誉)を構成しうる。それを回避したければ、人目にさらされる時間帯の外出を避け、自宅や自室に退却するしかない(石川2003)。これが「ひきこもり」であり、いわば地域からの排除である。

つまり、「ひきこもり」の人びとがおそれ、それを回避しようとさらに深く孤立へと陥っていく問題の核心は、自らのスティグマ——自身がいま、正統に居られる場所を失っているという不名誉——が露呈することである。露見を恐れるのは、それがさらなる排除や差別をひきおこしうるため、当然これは個人ではなく、社会や地域の側の問題である。

障害学(石川・長瀬1999、石川・倉本2002)によれば、社会問題やその渦中にある人びとの生きづらさを捉える際、それを当事者である彼(女)個人に帰責される問題であると捉え、その個人の内面や行為に介入していく立場を個人モデルという。他方で、それを、彼(女)をとりまく社会環境の側に責任がある問題と捉え、その社会環境に介入していく立場を社会モデルという。

ここでは後者の観点が重要である。社会モデルの観点からは、「ひきこもり」のみならず、さまざまな現われをもつ

---

テゴリーの人びとが似たような排除の過程をゆるやかに共有しつつ、孤立させられていく機序が見えてくる。そしてそれと同時に、そうした過程のなかにいる人びとにどのような支援が必要であるのかも理解できるようになる。

先に、スティグマの露見をおそれ、それが予期される時間・空間に身をおくことができないことを「ひきこもり」と記述した。逆に言うと、彼(女)たちは、スティグマを回避しうる時間・空間には出ていくことができる。とすれば〈居場所のなさ〉とは、スティグマを抱えずに居られる場所が地域や社会に欠けていること、と言い換え可能である。

これこそ、物理的かつ社会的に身をおくことのできる時間空間の環境における欠損を〈居場所のなさ〉と捉える、社会モデルの〈居場所〉観である。そこから導かれる支援のありようとは、スティグマを刺激されずに参加し、居ることができるところ——つまりそれが〈居場所〉である——を人びとの身近な環境内に創出し、それらへのアクセスを保障していくことである。

ところで、〈居場所づくり〉がそうした時間空間の物理的・社会的創出なのであるとしたら、そのとりくみは、通常イメージされるような、地域や社会のなかに単にサロンやカフェ、フリースペースのような場を開設し、その事業や施設を運営するといったことだけでは不十分であろう。〈居場所のなさ〉を抱える人びとは各地に大量に存在しているためである。

〈居場所づくり〉が量的に不十分だというだけではない。上述の通り、〈居場所のなさ〉を抱える人びとのありようは多様である。とすれば、〈居場所づくり〉を行う側においても、人びとのニーズの多様さを包摂できるだけの多様性を備える必要がある。こうした課題は、これまでの〈居場所づくり〉の研究史においてどのように捉えられてきたのだろうか。

---

## 2. 研究史

概観しておく、〈居場所づくり〉の研究はこれまで、基本的に、それが活用される支援の文脈に応じて個別にとりくまれてきた。例えば、「不登校者の居場所」(朝倉1995、貴戸2005、NPO法人フリースクール全国ネットワーク2009)、「精神障害者の居場所」(斎藤2002; 2010、横川2003、中村2014、東畑2019)、「ホームレスの居場所」(うてつ2009)、「セクシュアル・マイノリティの居場所」(砂川2015、菊地・堀江・飯野2019)というように。支援も研究も、多くはカ

テゴリーごとの縦割りになっているというのが現状である。

本稿ではそれらの共通項をこそ探っていきたい。というのも、前章で「ひきこもり」を例に見てきたように、人びとを孤立へと追いやる力は環境のうちにあり、そうした排除のメカニズムにおいて人びとの状況は構造的に類似しているためである。となれば、排除への対抗である〈居場所づくり〉もまた構造的な共通性のもとにとりくまれる必要がある。

とはいえ、それらを越境し〈居場所づくり〉の共通項を探っていくとくみがないわけではない<sup>2</sup>。〈居場所づくり〉の統合ともいえるそれは未だ着手されたばかりだが、ここではその到達点と課題とがどこにあるか、確認するところから始めてみたい。検討の俎上に載せるのは、南出吉祥『『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質』（2015年）である。

南出によれば、〈居場所〉の現状とは、「不登校」支援に出自をもつ〈居場所づくり〉が「若者・ひきこもり支援」や「各種支援活動」、「子ども・若者の遊び場・社会活動の場」、「地域における『第三の場所』』といったさまざまな文脈へと多様に展開していったものだという。もはや見通しがきかないような多様性の現状はこうしてできあがったとされる。

では、「不登校」文脈からさまざまな文脈へと越境拡散していった〈居場所〉とはそもそもどのような場であったのだろうか。南出によればそれは、①世間の規範から離れられる避難所、②他者から承認・受容してもらえらる場、③創造性が発揮できる自由な空間、という三つの機能を果たす場である。そうした機能の場が各所に広がっていったのだという。

こうした現状認識は、南出の独創というわけではなく、〈居場所づくり〉界限——とりわけ南出自身がその中心にいる「若者支援」や「社会教育」の界限——で概ね共有されているもので、それを改めて言語化したものと言える。この認識自体に誤りがあるわけではないが、しかし、こうした言説が産み出しうる効果について、ある危惧を感じている。

それは、出発点としての「不登校」文脈の強調である。上記の言説は、「不登校の居場所」を〈居場所づくり〉の正統なありかたと位置づけ、それがそれ以外のさまざまな文脈へと移植されていったものと読むことができる。南出自身は〈居場所づくり〉の多様性について十分慎重に議論しているが、議論の枠組み自体は「不登校」文脈が基点となっている。

その何が問題なのだろうか。2000年代以降、〈居場所

づくり〉という営みが当初の文脈を離れさまざまな領域で自由に展開され、各所のローカルな事情に合わせて多彩な実践を産み出していくことになるのだが、言説の基準が「不登校」由来の「居場所論」にあるため、それ以外のものは「本来の居場所」とは異なる劣化版、といった捉えかたがされやすい<sup>3</sup>。

結果、さまざまな領域や文脈に遍在するようになった〈居場所〉や〈居場所づくり〉という営みを、そしてそれが宿すに至った新たな特質を、従来の「居場所論」が捉え損ねるといった事態が生まれているように思われる。一方で、そうしたとりこぼしをフォローするように近年活性化しているのが、「まちの居場所」と名づけられた議論である。

「まちの居場所」とは、主として建築・環境デザインを専門とする人びとが2000年代以後、各地で観察されるようになった空き家／空地などの活用による多世代・多カテゴリーの人びとの〈居場所づくり〉実践を総称した命名である。これまで主に、日本建築学会（2010;2019）、田中康裕（2019）などがその成果として公刊されてきた。

それによれば、「まちの居場所」とは、福祉施設やフリースクール、コミュニティカフェと、それぞれの文脈や事情により採用される形態はさまざまだが、まち／地域における生活の質の向上・改善をめざす、人びとの自生的な実践の場をゆるく名指す概念である。「ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」などの動詞とセットで語られているのが特徴的だ。

こうした動詞群が示唆するのは、「まちの居場所」をめぐる議論が、人びとをとりまく環境としてのまち／地域に照準するという意味で、社会モデルとしての〈居場所づくり〉を意識した議論になっているということである。そこには、〈居場所〉の社会的かつ物理的な乏しさにどう対処していくかという問題意識がすでに組み込まれている。

一方で、従来の「居場所論」は、対象者——例えば「不登校の子ども」——にとつての意味や価値を重視し、それに最適化した場を志向する。起源となる「不登校の居場所」の正統化とその特質への過剰ともいえるこだわりはそこから来るものである。こうした対象者重視のかまえは、支援の個人モデルへの立脚を意味する。

個人モデルの支援とは、対象者との1対1の関係において、支援者がその相手に対しさまざまな介入を行い、対象者の思考や価値、規範、行為などを変容させることをめざすものであった。〈居場所づくり〉はその字義においては対象者をとりまく環境に照準するものだが、ここではそれが個

人への介入のための単なる道具として捉えられている感がある。

もちろん、支援の個人モデルとして〈居場所〉や〈居場所づくり〉を捉え、実践することに意味がないわけではない。しかし、そこに潤沢な資金や人員、充実した制度が存在するのではない限り、個人モデルの支援論を十全に機能させるのは困難だろう。現状はそれらに乏しく、ゆえにそれらを「ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」観点が不可欠である。

よって、「まちの居場所」のような社会モデルの観点を採用し、従来の「居場所（づくり）論」——個人モデルとしての〈居場所づくり〉——を更新していく必要があると筆者は考える。それは、孤立する対象者を直接支援する〈居場所づくり〉ではなく、そうした支援が可能な環境をどう構築していくかを考えるような〈居場所づくり〉の議論である。

そこで本稿では、社会モデルの観点到ったうえで、たぐさんのさまざまな人びとの〈居場所のなさ〉に対峙していくための〈居場所づくり〉とはどのようなものかを考察していきたい。その際、〈居場所づくり〉のありかたを理論的かつ規範的に考察していくというのではなく、現場における実践事例やデータをもとに考察する方法を採用したい。

というのも、実際の〈居場所づくり〉の現場では、上記の社会的要請が何らかのかたちで顧慮され、それを組み込んだ実践の試行錯誤が重ねられてきたはずだからで、そうした現実との格闘の痕跡それ自体が考察のための手がかりを潤沢に含んでいると考えられるためである。研究は、そうした草の根の〈研究〉実践をもそこにとりこんでいく必要がある。

以下では、実際の活動現場における実践事例をもとに、この問題について考察していきたい。地域や社会における〈居場所〉とその多様性の乏しさに、実際の〈居場所づくり〉はどのように対処しているのであろうか。そこでの達成と課題とはどのようなもので、それらは今後の〈居場所づくり〉のありようにどのような知見をもたらしてくれるのだろうか。

以下、本稿の構成を示す。3章では、調査方法ならびに対象となる実践の概要を示す。事例としては、山形市でとりくまれた〈居場所づくり〉実践「ぶらっとほーむ」（以下「ぶらほ」と略記）を扱う。4章では、「ぶらほ」の〈居場所〉を増やす実践について記述する。5章ではそうした実践の意味を考察し、6章では本稿の達成と課題についてふりかえる。

### 3. 調査概要

#### (1) 調査の対象と方法

本稿では、地方都市・山形市において2003～19年まで〈居場所づくり〉にとりくんだ若者支援NPOである「ぶらほ」の諸実践を検討の対象としたい。後に改めて述べるが、筆者は同NPOの共同代表であるとともに、その現場で支援実践にたずさわるスタッフでもあった。本研究は、実践者がそれを改めて対象化する「当事者研究」（熊谷2020）でもある。

ところで、全国各地に数多ある〈居場所づくり〉のなかで、なぜこの「ぶらほ」が調査・考察の対象として選択されるべきなのだろうか。筆者自身はその当事者ゆえに調査データが豊富に取得できるという点も大きいですが、より重要なのは、①当該事例が社会モデルに基づく実践であること、②地方発の事例であること、の二点である。順に見ていこう。

そもそも本稿の目的は、これまで専ら個人モデルの観点からなされてきた〈居場所づくり〉をめぐる議論を社会モデルの観点から照射し返し、これまであまり光をあてられてこなかったような、〈居場所づくり〉の領域を明るみに出すことである。それにより、混沌とし閉塞しつつある〈居場所〉をめぐる議論に風穴をあけたいと考える。

そうした目的——社会モデルを採用することの利得をわかりやすく示すこと——にまず適した対象とは、自身もまたそうした社会モデルに立脚し、自覚的に支援活動にとりくんでいる／いたような実践主体であろう。そうした主体の営みを質的に厚く描き出すことにより、〈居場所〉を社会モデルでまなざすことの利点を説得的に示すことができる。

「ぶらほ」はその意味で——詳しくは後に述べることになるが——自覚的に社会モデルを採用した、類例のあまりない支援実践である。それは、活動の渦中にその主体によっても表明されていたことではあるが（滝口2017）、それを観察した〈居場所〉の研究者らによってもしばしば指摘されていたことである。以下は、ある社会学者（30代・女性）によるそうした証言の一つである。

「ぶらほ」のユニークさは、誤解を恐れずに言えば、〈個人を助けること〉よりも〈場を育てること〉を優先した点にあったと私は考えています。つまり、「ありのままにられる場」をきちんと育てることができれば、そこに集まる人たちも自ずと楽になれるという発想があったのではないで

しょうか。〈個人を助けること〉に主眼を置くと、スタッフと利用者の間にはどうしても「支援する側／される側」という非対称性が生まれてしまいます。一方、〈場を育てること〉を目的にすれば、そこに関わる人は皆、ともに場を育てていく「仲間」あるいは「同志」になることができます。／実際、「ぶらほ」では誰がスタッフで誰が利用者なのか、ほとんど区別がつかせませんでした。「ぶらほ」に遊びに行くようになった当初、私はそのことに大いに戸惑い、うろたえてしまいましたが、それはつまり、ひきこもった経験の有無や立場の違いによって相手との間に線を引き、振る舞い方を変えていたからなのでしょう。これは私にとって大きな気づきでした。そして、この気づきは支援に対する考え方・見方も大きく変えていきました。(石川良子「「仲間」あるいは「同志」」「ぶらほ」とは何であったのか?(上)」p.11)

もう一点、「ぶらほ」を対象に据えるべき積極的な理由がある。それは、当該の実践が地方におけるとりくみである点だ。〈居場所〉の乏しさは、人口規模が大きく、行政に予算が相対的に多くあり、資本がさまざまな消費機会をつくりだしているような大都市では、さほど前景化しにくい。それがより顕在化しやすいのは、地方の社会・地域においてである。

地方では、そこに大都市のような諸条件がそろっているわけではなく、場所や機会の顕在的な選択肢に乏しいため、〈居場所〉の乏しさが人びとの間により深刻なニーズとしてたちあられやすい。その意味で、地方というのは〈居場所のなさ〉が多発する「課題先進地」と位置づけることができる。

とするなら、地方こそが〈居場所〉の乏しさ問題への(大都市とは)別様のとりくみや創意工夫が切実さを以てなされ、試行錯誤がより生産的にとりくまれている場所と考えることができる。よく知られる秋田県の「自殺」対策(中村2017)、同県藤里町の「中高年ひきこもり」対策(藤里町社会福祉協議会・秋田魁新報社2012、菊池2015)などはその好例であろう。

そう考えると、〈居場所づくり〉についても、資源や機会に恵まれ〈居場所〉やその代替物がさまざまなかたちで身近に存在しているような大都市ではなく、それらに乏しい地方にこそより先端的なとりくみを見出すことができる。そうした現場から産まれたものをもとに考察を進めていくことは、理論の地平をさらに先に広げることにもつながるだろう。

地方の実践事例へ着目することの意義は、そうした研究上のものに限られない。従来よく見られたように、大都市の「成功事例」に注目し、それを制度や政策のモデルに据えたとしても、資源や機会がそれと同じように豊富な大都市においてならともかく、それらに乏しい地方において、それがモデルとして機能するかは怪しいだろう。

だが、その逆——〈居場所〉に乏しい地方での事例から見えてきた方法や工夫をより条件に恵まれた大都市に適用すること——であれば十分に成り立ちうる。さらにそうした地方発のモデルは、全国各地の似たような条件のもとにある地方の社会・地域にとって、より親和性や実効性のあるものになりうるはずである。

以上の条件をそなえた支援実践の事例として、本稿では「ぶらほ」をとりあげ、その〈居場所づくり〉の創意工夫を検討していくが、その際の調査方法としては質的調査の方法論を採用したい。質的調査とは、(一般的な社会通念とは異なるような)「他者の合理性」を理解し、明らかにしていくのに適した方法である(岸・石岡・丸山2016)。

本稿は、〈居場所〉を増やす、しかもそれを資源や機会に乏しい地方において成功裏に達成しているというような、通念とは異なる「他者」としての〈居場所づくり〉実践を対象とするものである。当然、そこで何が生じているのかを理解するためには、その人びとの営みを身近でよく観察し、微細にわたりその意味を解釈していくしかない。

さらに本稿の場合、かつて筆者自身がその実践主体でもあったようなとりくみを検討の俎上にのせるものであり、そこに一つ、認識論上の課題を抱えているということになる。自身の実践を同じ当人が調査・考察することとなるため、そこには利益相反や我田引水の疑いが差しはさまれることになるためである。

こうした疑いを回避するため、本稿では、調査の対象を可能な限り限定して捉えたい。具体的には、「ぶらほ」がその2003～19年の活動において残したさまざまな史料をもとに、そこに記された〈ことば〉の分析や解釈を行うというやりかたで研究を進めていきたい。史料には、実践のツールならびにその成果として編まれたさまざまなテキストが含まれる。

例えば、「ぶらほ」が毎月会員向けに活動報告を行っていた『ぶらほ通信』(創刊号～193号)、「ぶらほ」の活動を外部向けに紹介した冊子『ぶらほ入門』(2006～08年)、『ぶらほの使いかた!』(2015年)などのなかに、その実践ならびに当時それらに関与した人びと——〈居場所〉スタッフ

(当時の筆者を含む)とその参加者たち——の痕跡が刻印されている。

これらのテキストの大半は公刊され、〈居場所づくり〉実践の過程で実際に用いられたものである<sup>4</sup>。よって、本稿で解釈に用いたデータについては基本的に誰であっても追跡が可能であり、他者の検証にも開かれている。そうした公開性や検証可能性を以て、本稿では、研究上必要な最低限の条件をクリアしているものとする。

もちろん問題となるのはその解釈であり、いかに客体的なデータを用いたとしても、それが自身に都合よく解釈されるのでは批判は免れ得ない。筆者としてはできる限り「邪念なく」分析・解釈を行いたく、それにつとめようと考えているが、それが成功しているか否かは読書諸賢の判断に委ねるよりほかはない。

## (2) 事例の概要

「ぶらほ」とは、2003年4月から2019年3月まで、山形市で「孤立しがちな若い世代の居場所／学びの場づくり」をミッションに20～40代の会員たちによって運営されてきた〈居場所づくり〉の市民活動実践である<sup>5</sup>。その共同代表を、筆者(1973年生まれ、男性)と松井愛(1976年生まれ、女性)がつとめてきた。

後述するように、年を経るごとにその活動は多岐にわたっていくようになり、それが最も活発であった時期には、実人数で年間300人以上もの人びとが参加するようなコミュニティとなっていた。なお、母体となったNPOは2019年8月末に解散し、2020年現在、その〈居場所づくり〉の活動が後継の三団体に引き継がれ、同市内の各所で続けられている。

専従のスタッフは上述の松井を含む1～2人でいどで、他は、別の足場や仕事をもちつつ、サードプレイス(オルデンバーグ1989=2013)として活動に関与していた。こうした活動スタイルは、「タク足モデル」と呼ばれ、推奨されていた(筆者もそうした兼業スタッフの一人であった)。ボランティアベースで運営され、予算規模が年間1000万円未満の小さな「草の根NPO」(澤村2006)である。

〈居場所づくり〉というと、「不登校・ひきこもり」など利用対象者のカテゴリーが設定されていて、その該当者だけが集まり、専門的な支援を提供される「承認の共同体」の如きものがイメージされるかもしれない。「ぶらほ」の実践はそうしたものと異なり、雑多な人びとが同じ時空間にゆるく共在

する場となっていて、その点がしばしば注目される(例えば、南出2015)。

以下ではまず、「ぶらほ」のそうしたユニークな支援実践の全体像を概観し、そのうえで本稿の問いである〈居場所〉を増やすとくみに関連する諸実践について具体的に検討していきたい。とりわけここでは、「ぶらほ」がその活動の環境であるまち／地域との間でとりおこなった種々の実践が検討され、そのことの意味が考察されるだろう。

「ぶらほ」では、活動の始まりから終わりまでの16年間休むことなく、誰でも参加できるフリースペースが常時開設され、その活動があらゆるとくみの中心に位置づいていた。主に毎週水曜から土曜までの日中に開放されていたそのスペースは、若い世代に位置するさまざまな立場や年代、境遇の人びとが常時10人以上集うたまり場となっていた。

そしてここでは、雑多な人びと——例えば、「不登校」「通信制生」「ひきこもり」「発達障がい」「聴覚障がい」「視覚障がい」「非正規労働」「シングルマザー」「自営業」「会社員」「大学生」「休業」「無業」「LGBTQ+」などさまざまなカテゴリーに配される人びとで、通ってくる目的や意図も多様——による、にぎやかな対話や交流が日常的に行われていた。

そうした交流は、フリースペースのスタッフやそこに集う常連メンバーなどがコミュニケーションの促進役・媒介役となることでさらに活性化される。その多くはたわいのない雑談や肩肘の張らないおしゃべりだが、むしろそれゆえに、その過程でさまざまな〈ことば〉が生成する。弱音や本音などが含まれた〈ことば〉たちである。

そうやって口にされた〈ことば〉のうちに、何らかの「困りごと」らしきものを看取すると、スタッフはそれらへの対処に動きだすこととなる。手もちの資源で対応できる場合はもちろんそうするが、「困りごと」の種類によっては、スタッフだけでは対処できないものもある(というか、雑多な人びとの集う場であるため、そういうケースの方が多)。

そこでスタッフは、その問題に対処可能な資源をまち／地域内から探し出し、その担い手たちとつながり、彼(女)らと協働で当該の「困りごと」について考えたり学んだりできる小規模な集まり——あるとき「テーマ・コミュニティ」と筆者が名づけ、その呼称が定着している——をフリースペースの周辺に新たに開く、ということを行う。

このためテーマ・コミュニティは、まち／地域に存在するさ

---

さまざまな活動主体との共同制作物とも言えるもので、増えていくにつれ、それらが地下茎のようにまち／地域のあちこちにはりめぐらされていくものとなる。その意味で、自分たちの関与しがたい時間・空間としてのまち／地域のなかに、自分たちの基地や陣地を埋め込んでいく実践でもある。

そうやって開かれていった場には、「不登校」「非正規労働」「NPO・市民活動」「地方都市」など、社会的なテーマに関連するものもあれば、「コスプレ」「花笠踊り」「映画」「まちあるき」など、サブカルチャーに連なるものもある。これらのテーマ・コミュニティが、「困りごと」を抱えた若者たちの自由に使える資源や足場となっていくのである。

こうした場のつくられかたを、ある典型的なエピソードで説明したい。2018年夏、市内の適応指導教室を介し、不登校の子どもを抱えるシングルマザーのAさん(30代・女性)が「ぶらほ」を訪れる。同教室より「ぶらほ」のテーマ・コミュニティに出自をもつ「親の会」の存在を知らされ、その伝手をたどるかたちでフリースペースにやってきたという。

Aさんとフリースペースの人びととの間でもともと交わされていた話題は「不登校の子どもの居場所をどうつくるか」であったが、そこでのおしゃべりの中で、Aさんは「この人たちにだったら話しても大丈夫かな」と自身がセクシュアル・マイノリティ(以下、「セクマイ」と略記)であることをカムアウトするに至る。

Aさんのカミングアウトには、「ぶらほ」がその当時とりにくんでいたある企画も関係している。それは、セクマイの若者たちの現状を描いたドキュメンタリー『女になる』(監督:田中幸夫、2017年、日本)の自主上映企画で、ちょうどその当時、フリースペースではそうしたテーマでのやりとりが頻繁に交わされていたのだった。

とはいえ、ひとつ補足しておく、もともとフリースペースにはセクマイの若者たちも複数つながっており、そうした話題が交わされる機会は以前よりそれなりにあったが、この時期はその頻度が上がっていたのだった。やがてAさんも上映準備の活動に参加するようになり、「ぶらほ」にも頻繁に足を運ぶようになっていく。

一方、上映活動を通じて「ぶらほ」の人びとは、自分たちの暮らす山形というまち／地域にもセクマイの人びとがたくさん存在し、生活しているということ、しかし、彼(女)らには自分らしさを保ったまま、つまりセクマイであることを隠す努力を特段必要とせず、安心して居られるような〈居場所〉が乏しいという現実を知ることになる。

---

上映期間中、会場となった映画館でお客を迎えるなかで「こんなにもたくさんの当事者がいるのか」と驚くほどのセクマイの人びとを目にする。加えて、上映企画に応援メッセージをくれたのは隣県のセクマイ・サークルの人びとからのみで、山形県内からは無反応だった。継続的かつオープンに活動しているサークルが山形県内には不在なのだった。

こうしたことも上映準備期間には頻繁に話題となる。もちろんそうしたコミュニケーションにはAさんも参加しており、やりとりのなかで「居場所がないのなら、カムアウトしている自分がまずはやってみよう」と決意する。やがて、「ぶらほ」のスタッフといっしょにテーマ・コミュニティを立ち上げ、「多様な性について語る会」を開催するに至る。

そのテーマ・コミュニティはとりくみを重ねていき、やがて市民サークルとして自立し、「ぶらほ」のネットワークともつながりながら独自の活動を展開していくこととなる。例えば、翌2019年5月にはドキュメンタリー『性別が、ない!』(監督:渡辺正悟、2018年、日本)市民上映会を山形市内において開催した。

以上のような過程をさまざまな「困りごと」の現われに応じてくりかえすことで、「ぶらほ」は、中心にフリースペース、その周囲にさまざまな種類のテーマ・コミュニティ、そしてさらにそれらが地域の支援資源へとゆるやかにつながっているような、ネットワーク状の支援空間をつくりだしてきた。

この意味で、「ぶらほ」が行っているのは、目の前の対象者と直接向き合う支援実践——個人モデルの支援——にとどまるものでなく、そうした直接支援を効率的に果たすための環境=舞台装置を構築していく実践——社会モデルの支援——でもあるといえる。本稿の事例を「ぶらほ」にしたのは、それが自身のそうした方法論に自覚的な実践だからである。

---

#### 4. 〈居場所〉を増やす

---

質・量の両面における〈居場所〉の乏しさ——とりわけそれは地方の地域や社会において深刻である——に対処するために、〈居場所づくり〉実践は、自分たちをとりまく具体的な環境としてのまち／地域のうちに〈居場所〉を増やすというとりくみを行わざるを得ない。しかし、個人モデルに偏る研究史はこれまでさほどそこに光をあててこなかった。

そこで本章では、「ぶらほ」の実践史をもとに、〈居場所〉



を増やすとりくみの具体相を明らかにしていきたい。「ぶらほ」を検討の俎上に据えるのは、それが、〈居場所〉の乏しさが際立ち、当該の課題がより深刻に迫っており、ゆえにより切実にそれらへの対処がなされてきたであろうと想定される地方の社会・地域における実践事例だからである。

〈居場所〉を増やすにあたり、「ぶらほ」がまず行ったのは、諸々の活動の拠点となるフリースペースをまち／地域のなかに物理的かつ社会的に開くことであった。当時（2003年4月）、山形市（人口約25万人）には民間のフリースペースが二か所しかなく<sup>6</sup>、新たにフリースペースを開くことそれ自体が〈居場所〉をまち／地域に増やすことを意味していた。

フリースペースやコミュニティカフェ、サロンのごとき〈居場所〉を常設の拠点として開くことには、実際にそこでケアや支援を常時、直接供給できるという社会的・物理的な意義に加え、それが「そのまち／地域に存在する」ということがもたらす象徴的な意義もある。例えば、「ぶらほ」を利用する若者Bさん（10代・女性）は次のように語っていた。

「ぶらほ」は「ある」っていうことにすごく意味があることだと思いますね。…（中略）…それは、「あそこ（ぶらほ）があるからがんばれる」みたいに重いものではなくて、それよりもっと軽いものですね。深刻に相談しに来る相談室という感じではなくて、顔を出せる居場所というか、自分が常連の喫茶店というか、そんな感じですね。あそこに行けば、知り合いがいて、ときどき気軽に顔を出して、そこでゆったり話ができる。「あることが大事」というのはそういうことですね。（『ぶらほ入門2007』p.42）

このように、そこを利用する人が実際にどのくらいいるかということとは別に、そうした場が自分たちの暮らす身近な環境＝まち／地域に実際に存在し、それに触れたいときにはいつでもできるという潜在的な利用可能性が重要なのであった。だとすれば、なおのこといっそうそれらは、それなりの密度でまち／地域に存在している必要があることになる。

しかも大事なのは〈居場所〉の供給量に限らない。似たような仕様や雰囲気のある〈居場所〉が複数あっても、それが肌に関わなければ、その人はどの〈居場所〉をも使えないということになりうる。必要なのは、質的な多様性である。要は、まち／地域ごとに、多彩なカラーの〈居場所〉が豊富に存在

しているような環境が望ましいのだということだ。

こうした要請に対し、「ぶらほ」が行っていたのは、さまざまなテーマでその都度それに関心ある人びとが集まり、対話したり交流したりできる場——テーマ・コミュニティ——をフリースペースの周囲に随時、臨機応変に立ち上げるといった実践であった<sup>7</sup>。これは、小さな〈居場所〉を開き、増やしていくということ（①）を意味する。

一方で、そうした受容可能性（キャパシティ）の拡張によって対処可能となる価値の多様性には限度がある。それでは〈居場所〉を求める人びとの受け皿として不十分ということであれば、さらにそれらテーマ・コミュニティの外側に〈居場所〉の代替物を求め、そこに広がるまち／地域そのものにアプローチしていくしかない。

「ぶらほ」の実践史を特徴づけているのは、そうしたまち／地域へのアプローチである。それは一方で、近隣のまち／地域に既に存在する他所の〈居場所づくり〉実践とつながり、そうした場へと人びとを媒介していく（②）というかたちとなって現れた<sup>8</sup>。しかし、地方にあっては〈居場所づくり〉実践自体がかなり稀少で、当然それだけでは不十分である。

そこでさらに、「ぶらほ」では、まち／地域の各所において、その場やそこにいる人びとが〈居場所〉を自称したり自覚的に〈居場所づくり〉を行ったりしているわけではないが、実質的に〈居場所〉としての機能を果たしているような場を見つけ出し、それらを〈居場所〉と名指していくような解釈の実践（③）が行われていくようになる。

ここまで見てきたように、自分たちをとりまくまち／地域の環境内に実質的な〈居場所〉を増やしていくために、「ぶらほ」では主に、①小さな〈居場所〉を開く、②他所の〈居場所づくり〉とつながる、③外部のさまざまな場に〈居場所〉を読み込んでいく、といった実践が重ねられていた。これが、社会モデルからみた〈居場所づくり〉のありようである。

ところで、これら（①②③）は〈居場所づくり〉の外延拡張に至る論理的な順序とでもいえるべきものであり、実際の「ぶらほ」の実践史においては、これらが混在し、同時並行的にとりくまれていた。そこで共通して求められていたのは「まち／地域の探索」で、「ぶらほ」はそれに応えようとさまざまな実践を繰り返していたのだ。

以下では、〈居場所〉を増やす諸実践の過程をより具体的に明らかにしていくため、「ぶらほ」の実践史のなか

で「まち／地域の探索」にあたる具体的なとりくみとその展開を、時間軸にそって追いかけてみたい<sup>9</sup>。それはいわば、自前では準備できない〈居場所づくり〉の資源を現地調達しつつ、徐々にまち／地域に自領を広げていくような歩みである。

概略のみを先に示しておく、その過程とは、(1)外部における〈居場所っばい場〉の探索、(2)〈居場所っばい場〉の人びととの接近と協働、(3)新しい〈居場所〉の創出、(4)新しい〈居場所〉どうしのネットワーク化、というものである。以下、順番に見ていきたい。

### (1) 外部における〈居場所っばい場〉の探索

「ぶらほ」では、フリースペースが開設された2003年春より、日常的な活動の拠点であるそこを出て、スタッフとメンバーとが連れ立ち、まち／地域のさまざまな場所やイベント等に「お出かけ」するという実践が不定期に、しかしそれなりに頻繁に行われてきた。それは、花見やお祭り、芋煮会といったものから、演劇や映画など多岐にわたっていた<sup>10</sup>。

こうした「お出かけ」の実践は、基本的に屋内で営まれているフリースペースの活動やそこで過ごす人びと、その関係性などに動きや変化をもたらそうと多くの〈居場所づくり〉において行われているものでもある(荻野2013)。このため、行き先としては誰でも立ち入りできる公共空間が選ばれることが多く、それが有料の場合でも廉価であることが選択の条件となっていた。

さらに、そこで当初、行き先を決める際に重視されていたのは〈居場所っばい場〉——当時の言葉遣いでいうと「ぶらほっばい場」——だった。〈居場所っばい場〉とは、そこに参加者へのケアや配慮が存在していると想定されるということである。「ひきこもり」などの経験ゆえに、スティグマの露見を恐れて地域との接触を避けている者も多く、行き先はどこでもよいわけではなかったのである。

斎藤(2000)によれば、困難や弱さを抱えたメンバーへのケアや配慮を中心に成り立っている領域のことを親密圏という。近代社会は家族をそこに位置づけたが、ケアの社会化(上野2011)により、現在では当事者グループやNPOなどがその担い手として期待され、役割を果たすようになっている。上記の探索とは、要するに、まち／地域における親密圏の担い手やその拠点さがしであったと言える。

その場合、自ら〈居場所〉なり親密圏なりを称し、自覚的にケアや配慮にとりくんでいるような〈居場所づくり〉実践がす

でそこにあらるのであれば、それをわざわざ「探索」したり「発見」したりする意味も必要もない。わざわざそうするのは、通常は〈居場所〉と見なされていないような場にそれを読み込み、見立てていくということである。

だからこそ、「ぶらほっばい」または〈居場所っばい場〉という表現になるわけだ。それでは、まち／地域のなかのいったいどのような場所が〈居場所っばい場〉として「発見」されていったのだろうか。ここでは代表的なものとして、二つの事例をあげる。一つ目は地元サッカーチームのホームゲームの観客席であり、二つ目は大学の社会学ゼミである。

### ① 地元サッカーチームの応援席

まずは前者だが、こちらは天童市にある山形県総合運動公園陸上競技場(通称:NDソフトスタジアム)のホームゴール裏の観客席をさす。このブロックには、地元サッカーチームのサポーター団体が集まり、応援のフラッグが立ち並ぶ。応援席という位置づけゆえに、他の座席に比べて安価であり、試合中は応援の一体感を感じることができる場である。

もともと「ぶらほ」の人びとがこのゴール裏に頻繁に「お出かけ」するようになったのは、2003年、山形県社会福祉協議会が福祉団体に提供していた観戦チケットを「ぶらほ」もまた譲り受けるようになったことがきっかけである。ゴール裏の座席は、そうした招待者が割り当てられたブロックであり、その意味でも多様性のある場所なのであった(滝口2018:228-233)。

このように、雑多な人びとが「応援」というゆるい名目のもとで時間・空間を共にするというのが、このゴール裏という場の特徴であった。オンシーズンの期間中は毎週のように地元チームのホームゲームが開催されるため、その度ごとにこの場が開かれる。「ぶらほ」の人びとはこの場に足繁く通いながら、そこに、スティグマを感じずに安心して参加でき他者とながれる場、すなわち〈居場所〉を見出していくのである。

### ② 大学の社会学ゼミ

次に、後者について見ていきたい。こちらは、2007～08年にかけて、筆者が当時大学院生として通っていた庄内地方の大学の、社会学の教員が開催していたゼミのことである。大学での学びに興味を抱いたフリースペースの若者たちが、ゼミのようすを見学させてもらうことになり、筆者の引

率のもとでいっしょに「お出かけ」したのが出発点である。

彼(女)らがゼミに興味を抱いたきっかけは、フリースペースでのやりとりであった。そこで彼(女)らはよくアニメやマンガなどサブカルチャーの話題でもりあがっていたが、筆者は同じような風景を、若者文化を研究する担当教員のゼミ学生たちの間でよく目にしていた。そのことを話したとき、若者たちが大学という世界に興味を示したのである。

ゼミの教員と学生たちが快く受け容れてくれたこともあり、山形の若者たちが庄内のゼミに参加するというこの合同ゼミは二度ほど企画された(どちらも若者たちと学生たちとの合同合宿として行われた)。交流の深まりを経て、「ぶらほ」の若者の一人が同大学に進学先を決めたり、ゼミ学生の一人が「ぶらほ」に臨時職員として就職したり、卒業後のゼミOGたちが山形市のフリースペースを訪問するといったこともあった。

当初は大学とそこでの学びについて「自分たちの生きる世界からは遠く離れた場所」という認識であったフリースペースの若者たちだが、そこに〈居場所〉を感知したがゆえに、継続的な参加や交流へと至ったのであろう。そこには、当該ゼミのテーマが「自分の興味があることを調べ、社会的に考察する」というものであったことも深く与っていたように思われる。

このように、ゴール裏やら社会学ゼミやら、通常は〈居場所〉とは見なされないまち／地域の場のなかに、「ぶらほ」は積極的に「ぶらほっぼさ」を見つけ出し、それをもひとつの〈居場所〉と捉えていく解釈実践を行っていく。「ぶらほ」は他にも、労働相談<sup>11</sup>やアートワークショップ<sup>12</sup>など、さまざまな場のなかに〈居場所〉の機能的等価物を見出していった。

より重要であったのは、この〈居場所〉の機能的等価物、という発想だったかもしれない。つまり、〈居場所〉とは何らかの施設や組織のことではなく、機能を指すという捉えかたである。「ぶらほ」は、「ぶらほっぼい」場所をまち／地域において探索していくなかで、「ぶらほ」とそれらの場に共通する〈居場所〉という機能概念を見出していくのである。

そのことによって彼(女)らは、〈居場所〉を機能主義的に捉え返し、まち／地域のさまざまな場のなかに〈居場所〉の代替物——あるいは潜在的に〈居場所〉になりうる場——を自在に見出せるようになっていった。この〈居場所〉の機能主義的転回こそ、「ぶらほ」が〈居場所〉を増やしていくにあたり重要な役割を果たしていくのである。

## (2)〈居場所っぼい場〉の人びととの接近と協働

まち／地域のなかのさまざまな〈居場所っぼい場〉に出かけていき、その場に頻繁に参加するようになると、「ぶらほ」は次第に、そうした場を拠点とする人びとや運営する人びととも近づき、遭遇するようになっていく(そこから親密な交流やさらには何らかの協働に発展していくことも)。それらもまた〈居場所〉を増やすことにつながる実践である。

以下で具体的にとりあげるのは、山形市香澄町にある映画館「フォーラム山形」ならびに山形市宮町にあった服飾専門学校「山形女子専門学校」との接近と協働の事例である。前者とは2008年の『ひめゆり』自主上映企画をきっかけに、後者とは2010年のスカート制作ワークショップをきっかけに交流が深化していく。以下、具体的に検討していこう。

### ①フォーラム山形(以下「フォーラム」と略記)

「フォーラム」(1984年開館)は、ミニシアターに由来する映画館である。その伝統ゆえに、エンターテインメント系の作品に限らず、文芸やアート、社会派作品やドキュメンタリーが日常的に上映されている。洋画もアメリカ映画に限らず、ヨーロッパ、東アジア、中東など、多様な文化圏の作品をラインナップしているこだわりの映画館である<sup>13</sup>。

もともとそれは、いまから約40年前、山形の若者たちが始めた自主上映サークル「山形えいあいれん」(1979年創設)に起源を有する。「街に映画館はあれど、観たい作品が上映されていない」という不満を抱え、東京と山形とを何度も往復していた若者たちが、地元で自前の観賞機会をつくりだそうと自主上映会を開く活動にとりくんでいったのだった。

しかし、メンバーの結婚や出産なども重なり、ボランティアなサークル活動としてこのとりくみを続けていくことは次第に困難となっていく。一方で、「自分たちの映画館がほしい」との思いも募ってきた。そこで彼(女)らは映画館開設の市民運動を行い、人びとから広く資金を募る市民出資の形式で自前の映画館をつくりだしていったのである。

こうして1984年に誕生したのが「フォーラム」であり、このような経緯こそ、それが「市民の映画館」と称される所以なのであった。さらに、「フォーラム」とそれをつくりだした人びと、それらのネットワークは、山形というまち／地域において映画／映画館というメディア実践を担っていくさまざまな人びとをもそこから生み出していく。

その揺籃の一つとなったのが「山形県映画センター」(1979年創設)であり、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」(1989年開始、以下「映画祭」と略記)である。前者は、県内各地の映画館のないまち／地域に映画を届けることをミッションとする活動センターで、先述の「山形えいあいれん」がその運営を担い、「フォーラム」創設後はその傘下の一部門となった。

後者は、1989年に山形市の市制100周年記念行事の一環として始まり、現在まで継続されているもので、隔年の10月上旬に山形市中心街で開催されるドキュメンタリー専門の国際映画祭である。「フォーラム」はその会場でもあるが、のみならず、上記の運動／活動が育てたたくさんの人びとが「映画祭」スタッフとしてその運営を実質的に支えてきた。

山形というまち／地域には、このように映画／映画館の文化があちこちに豊かに存在しており、「ぶらほ」もまたそうした環境下で市民活動とその場を育ててきた。よってそこには、映画／映画館の文化が深く刻印されていくことになる。当初それは、フリースペースの「お出かけ」の行き先に、映画館や自主上映会が選択されることから始まっていく。

そうした選択に特別な意味——例えば、若者たちに映像文化を学ぶ機会を——があったわけではない。確かに、先述のサッカー観戦のように、関係者や周囲から招待や誘いを受けたことなどが行き先選びの直接のきっかけとしてはある。しかしそれ以上に、山形のまち／地域にとって映画文化は身近にごく普通にある選択肢だったことが大きいだろう<sup>14</sup>。

そうして「フォーラム」や「映画祭」、自主上映会などに「お出かけ」を重ねていくなか、2007年の「映画祭」会場で「ぶらほ」スタッフがドキュメンタリー長編『ひめゆり』(監督:柴田昌平、2006年、日本)のチラシを偶々手にする。後日、このチラシがフリースペースでの話題にのぼり、「ぜひ見てみたい」ということになった。2008年春のことである。

『ひめゆり』は、沖縄戦の地獄をいきのびた当時の女学生たちが戦後50年を経て重い口を開き、行った戦場体験の語りを13年にわたり記録したドキュメンタリー作品である。聞けば、語り手の人びとの意向でDVD化はされないという。観たければ映画館で上映してもらうか、自分たちで自主上映会を開くしかない。

このため「ぶらほ」は自主上映会を企画するのだが、その矢先、「フォーラム」でも同作品の上映を検討していると

いう情報が入ってきた。そこで、どちらがこの作品を上映するか「フォーラム」と交渉するべく、はじめてその場を開設・運営している人びとと遭遇することになった。現れたのは、社長のCさん(50代・男性)、Dさん(50代・女性)のご夫妻である。

話し合いの結果、「フォーラム」と「ぶらほ」が共催で同上映会を実施することとなり、それは沖縄戦があった6月の一週間にわたり開催され、成功裏に終了することとなるのだが、「ぶらほ」の人びとは、その過程ではじめて、自分たちがこれまで足繁く通ってきた場をつくってきた人びとの素顔とその(上記のような)来歴とを知ることとなったのだ。

それは、それまで巨大資本がつくっていたものとばかり思い込んでいた映画館が、実は自分たちと同様に「市民活動」にルーツをもつものであったり、「若者活動」であったりしたことへの気づきであり、自分たちがそこに「居場所」を見出していたことの根拠が改めて腑に落ちるという体験でもあった。

そうした気づきや感動——「フォーラム」はかつての若者たちが自身で作りだした「居場所」であり、その意味で「居場所づくり」の先輩にあたる——を、当時の「ぶらほ」スタッフは「フォーラム」の社長夫妻にも伝えていたのだが、それを言われたときの受けとめを当のDさんが言語化している。以下に引用しておこう。

松井さんとは、映画館〈フォーラム山形〉での『ひめゆり』上映のときにひんばんに話をする機会があって、誘導されるままに〈フォーラム山形〉の立ち上げや理念などを話していると彼女は「〈ぶらっとほーむ〉の理念と〈フォーラム〉の理念は一緒ですね。私たちより20年も先にこの山形で同じことをやっていた先輩がいたなんて、とても心強い〜」みたいなことをさりとおっしゃる。初めは正直意表をつかれた思いだった。そんなふう考えたこともなかったからだ。でもよくよく考えてみた。〈フォーラム山形〉の前身となった映画サークル〈山形えいあいれん〉から〈フォーラム〉の活動まで30年以上、数えきれないほどの多くの若者たちが、この映画の「居場所」に集いながら気のあった友人をつくり、あらゆる世代の人たちと交流し、人生を学び、自分らしさを解放させてきたに違いない。彼らは、一方で窮屈で辛い社会に生きながらも、敢然と生きてこられたはずだ。(Dさん「愛すべき「後輩」たちへ」『ぶらっとほーむクロニクル2003-2013』pp.24-25)

「フォーラム」と「ぶらほ」の共催による『ひめゆり』上映企画は、翌年2009年の6月、少し離れて戦後70年の節目となった2015年の6月と計三回にわたって行われ、それぞれ成功を収めることとなった。その間そしてその後も、両者合同のドキュメンタリー上映企画は、『ひめゆり』以外のさまざまなテーマにおいて行われていく。

例えば、2011年にはエネルギー問題を扱ったドキュメンタリー『ミツバチの羽音と地球の回転』（監督：鎌仲ひとみ、2011年、日本）、2012年にはGMO（遺伝子組換え作物）を扱った『世界が食べられなくなる日』（監督：ジャン＝ポール・ジョー、2012年、フランス）、2018年には（先述の）セクマイを扱った『女になる』などの上映会が共同で実施された。

共同企画はそうした映画上映ばかりではない。2010年からは、「シネマカルチャーサロン」（以下「サロン」と略記）と題し上映作品を観た人びとが集まり、感想などを語りあう会が「フォーラム」併設のカフェにて、断続的に開かれていくようになる（2016年まで、計22回）。これらは、会場を「フォーラム」、サロン運営を「ぶらほ」、と役割分担の上で実施された。

このように、「フォーラム」というまち／地域の社会文化の拠点との関わりが増していくにつれ、その周囲に「ぶらほ」と「フォーラム」が共同でつくりだすさまざまな中間領域——「ぶらほ」側から見るとそれが「ぶらほ」のテーマ・コミュニティということになる——が産まれ、それらが多岐にわたって増殖していくことになる。

当然それらは、「ぶらほ」のフリースペースに集う人びとがまち／地域を知り、そこに関わっていくための入り口の足場になるものである。やがて、それらを活用しながら映画館や上映会を自身の〈居場所〉にしていく若者や、そこで知り合った関係者に誘われて映画や映像の仕事につく若者などがうまれていくことになる。

一方でそれらテーマ・コミュニティは、外部——この場合は「フォーラム」という映画館とその界隈の人びと——からすれば、「ぶらほ」への入り口の足場となるものである。映画を観たり語ったりすることが目的で上映会や「サロン」に参加した人びとが、そこで「ぶらほ」という〈居場所〉を知り、そこから「ぶらほ」のさまざまな場につながるケースも頻出する。

テーマ・コミュニティがそうした新たな交通——映画館界隈にそれまでとは毛色の異なる新たな人びとを導くとともに、フリースペースにも新たな人びとを導く——をつくりだ

す媒介となっていたことは、当時の「フォーラム」映画館スタッフにも気づかれていたことだった。後に、映画館スタッフのEさん（30代・女性）が当時をふりかえって次のように語っている。

私が初めて「ぶらほ」と出会ったのは、フォーラム仙台から山形へ異動してきた2010年のことだ。当時、「ぶらほ」では映画の感想や意見を自由に発言する「シネマカルチャーサロン」という交流の場を、フォーラム内の会議室で定期的に設けていた。これはちょっとした驚きだった。映画愛好家の集いは、しばしばあった。だが、「居場所づくり」を掲げるNPO団体が『悪人』や『ハンナ・アレント』などの社会派作品にとどまらず、『ノルウェイの森』というような文芸作品まで取り上げていたからだ。／聞けば、2008年には映画『ひめゆり』を自主上映したという。上映に向けて何度も勉強会を開催して理解を深め、自分たちの足で地道に券売活動を行い、監督のトークショーまで設定し上映会を成功させたというのだ。映画は、いわゆる「映画好き」のものではない、もっと広く万人に開かれた文化資源なのだ改めて気づかされた。そして、その手腕を再び発揮したのが、2017年『野火』の上映会。劇場としては三度目の興行であったにも関わらず、初見の若い鑑賞者が多数訪れたことは記憶に新しい。／印象深いのは、「ぶらほ」の個性豊かなメンバーはみな、どこか安心した表情をしていることだ。この社会には、生き方と社会の仕組みが合わない人や、環境にめぐまれない、「戦う必要のない戦場」に送られた人がたくさんいる。かつては、私もそんな一人だった。「ぶらほ」とは、そんな戦場で孤独にならないための、あるいは背を向けるためのコミュニティであるにとどまらず、それぞれの内面を誰に憚ることなく発露できる場なのだろう。だから私たち映画館スタッフの手の届かない人や場所に、一本の映画を届けることができる。（Eさん「まだ見ぬどこか／誰かへと続く階段」『「ぶらほ」とは何であったのか？（上）』p.28）

以上で見てきたように、〈居場所っぽい場〉への「お出かけ」は、あるきっかけでその場の人びととの交流や協働に発展すると、そこから新たな〈居場所〉を産み出していくことにつながっていく。「ぶらほ」の多岐にわたるテーマ・コミュニティ群は、そうした出会いをもとに、双方に利益をもたらした

がら増殖していったものであった。

加えて、そこにはある副産物が付随していた。それは、とりくみが徐々にその場や人びとの来歴——それはまち／地域の来歴でもある——を知ることへとつながっていったということだ。まち／地域をめぐる知とは、現在の自分たちのアイデンティティを定位づける資源にもなりうる。それらを参照しつつ「ぶらほ」はその自己像を確立していくのである。

例えば、以下は、そうしたまち／地域の来歴を知るとともに、そうした歴史的な文脈において自分たちの〈居場所づくり〉の立ち位置を把握するようになっていった筆者（40代・男性）が、2016年にあるところに記した文章である。そこでは、市民がつくりだした映画の街・山形という文脈との相互参照のうちに「ぶらほ」が位置づけられている。

わたしたちのとりくみ[引用者注:ぶらほ]は、二〇〇〇年に不登校の子どもをもつ親たちの運動体「不登校親の会山形県ネットワーク」によって開始されたフリースクール(不登校の子どもの居場所)設立運動に端を発する。運動により県内ではじめて設立されたフリースクールに関わった若者たち——筆者はその一人——が、「不登校」「子ども」に限定されない居場所づくりをコンセプトに、そこから独立するかたちで始まったものだ。／実は、これら一連の試行錯誤に、さまざまなかたちで、市民運動／活動上必要となる資源や知見、ノウハウを供給してくれていたのが、やまがたの映画まわりの人びとなのであった。フリースクールの活動を通じてまず私たちが出会ったのは、自主上映会という文化だった。…(中略)…／二〇〇〇年当時、さまざまな市民グループが自主上映のとりくみを行っていたが、それらに活動の基盤や文脈、資源を提供していたのが、「山形県映画センター」(一九七九年設立)であり、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」(一九八九年開始)であった。さらにいうと、両者に活動の基盤や文脈、資源を供給する文化的拠点として、山形市内には「フォーラム山形」(一九八四年設立)という映画館が存在した。これらを中心とし県内のあちこちにひろがる文化系の人びとのゆるやかなネットワークが、わたしたちのようなゼロ年代やまがたの市民活動を育む沃土となったということだ。／では、いったいやまがたという場所のいかなる要因が、「山形県映画センター」と「山形国際ドキュメンタリー映画祭」、「フォーラム山形」という奇跡のようなトライアングルを可能にしたのだろうか。

それらが産声をあげるにあたり助産の役割を担ったのは、一九五〇～六〇年代にかけて東北各地で活発化していた生活記録・サークル運動と、そこで文化的・社会的覚醒を果たした当時の若者たちであった。彼(女)らを担い手として、文化の多様性を担保するためのさまざまな実践や活動が各地でにぎやかにとりくまれた。封建的で保守的なムラへのレジスタンス。／やがて高度経済成長をへて生成した企業社会や学校化社会が、若者たちの活動の場となったムラそのものを解体することで運動は収束の刻をむかえていくが、多様性という種子は、八〇年代以降、やまがたの街に花開いた映画文化という領野に受け継がれていく。そしてさらに、その映画という回路を経て、やまがたの次世代に手渡されていった。そう考えると、わたしたちゼロ年代以降のとりくみは、第三世代の活動にあたることになる。(滝口典典「戦後山形における〈居場所〉の系譜学」『ヤマガタの歩きかた 第2集 [試論篇]』pp.28-31)

この意味で、「まち／地域の探索」は、まち／地域のなかにもどんな場所や資源が存在しているのかを空間的かつ地理的に探るのみならず、時間的かつ歴史的に探っていく側面をも有している。ある場所との関わりが深化していくとき、それは後者が掘り下げられていくことを意味する。このことを、もう一つの事例においても確認してみたい。

## ②山形女子専門学校(以下「山形女専」と略記)

「山形女専」(1947年開校、2015年閉校)は、山形市宮町、JR北山形の近くにあった服飾専門学校である。高等科(3年)、専門科(2年)からなっていた。同校は長年、山形市近隣の「不登校」経験のある若者たちを受け入れてきた学校であり、「ぶらほ」共同代表兼スタッフであった松井愛も「不登校」経験ののちに入学し、両課程を経て卒業している。

スタッフの松井がOGであるということ、さらにはこの学校の在校生や卒業生がフリースペースに通ってきていたこと、フリースペースの若者たちのなかで同校に進学し在学・卒業した者がいることなど、「ぶらほ」と同校との関係はそれなりに深いものではあったが、それらはあくまでそれぞれにとつて通常業務の枠内でのことである。

そうした通常業務を超えて——双方が日常的な営みの枠内からそれぞれに一步ふみだして——お互いの間

に協働の領域をつくりだすようになっていった端緒は、2010年5月、同校に「ぶらほ」の人びとが「お出かけ」し、そこを会場に実施された「スカート制作ワークショップ」にあった。

これは、同月に「フォーラム」と協働で実施した「仮装&コスプレパーティつき上映」企画に参加するために、仮装&コスプレの衣装が必要となり、それを自作するために技術指導をもらうワークショップを「山形女専」の教員Fさん、Gさん(ともに40代・女性)に聞いてもらったもので、これ以後もFさん、Gさんと「ぶらほ」のつながりが維持されていくことになる。

ところで、この「山形女専」はある地域活動によって地元ではよく知られた学校である。その活動とは、近所に位置するJR北山形駅ロータリーにある小便小僧に同校の生徒たちがデザイン・制作した衣装を着せるというもので、それがカリキュラムに組み込まれ、1957年から2014年までの57年にわたり、年に3〜4回ずつの着せ替えが行われてきた。

しかし、同校は2015年3月に閉校してしまう。伝統あるとりくみの途絶を惜しむ声が関係者や地域住民からあがり、これを受けて、2015年の春より、同校の関係者も多く関わり、教員であったFさん、Gさんともつながる「ぶらほ」がこの活動を引き継ぎ、「小便小僧着せ替えプロジェクト」と題したテーマ・コミュニティを開いてとりくんでいくことになるのである。

この「小便小僧着せ替えプロジェクト」は、「山形女専」閉校後、衣装制作事業「S-labo」をたちあげたFさん、Gさんの協力を受け、衣装のデザインや制作を指導してもらいながら、同企画に集まった若者たちの手で進められてきた(2015〜2018年に計7回実施)。以下はそれをふりかえったFさん、Gさん、参加者Hさん(20代・男性)の言葉である。

小便小僧の衣替えを、私たちの元職場である山形女子専門学校から引き継いでくださり、衣替えのたびに製作のお手伝いをさせていただきましたが、参加者の皆さんが、初めて経験した事への素直な感動や、完成した時の喜びを表現してくれたことで、私たちも達成感を共に感じることができ、初心にかえってもの作りの楽しさを思い出すことができました。学生が女子ばかりの学校で仕事をしていた私たちにとっては、男性が洋裁をしている姿もとても新鮮でした。(Fさん・Gさん「出会いの意味を考え、糧としていく場」『「ぶらほ」とは何であったのか?(中)』p.10)

最初に、「ぶらほ」に繋がったときは「ぶらほ」メンバーとうまくやっていけるか心配でしたがメンバーの人たちが温かく迎え入れてくれました。／そんなメンバーの人たちとの思い出の一つは小便小僧の衣装づくりです。裁縫が得意ではなくうまくできるか不安でしたが、教えてくれた「S-labo」の先生たちや、一緒に作ったメンバーたちが、丁寧に教えてくれたので作ることができました。／今までは、他の人と一緒に何かを作るということをしたことがなく、この小便小僧の衣装づくりに参加したときまだ話したことないメンバーの人たちとも衣装を作りながら話したりして親交を深められたので良かったです。(Hさん「「ぶらほ」の思い出」『「ぶらほ」とは何であったのか?(上)』p.12)

以上、「フォーラム」と「山形女専」の事例に見られるように、「ぶらほ」の人びとはその「お出かけ」——まち／地域のなかの〈居場所っぽい〉場所の空間・地理的な探索——を通じて、まち／地域の社会文化が滲んでいるようなさまざまな場所・人びとと知り合い、それによってまち／地域に累積されてきた歴史や時間と出会っていくようになっていた。

そして「ぶらほ」は、そうした歴史的かつ時間的な資源のなかの〈居場所っぽさ〉を読み込むことで、いわばそれらを素材に、関係する場や人びとの協力も得ながら、さまざまなテーマ・コミュニティを新たに開いていくことになるのであった。ここで生まれていたのは、歴史的かつ時間的にまち／地域のなかの場や人を探索していくまなざしである。

「フォーラム」や「山形女専」との間での経験から獲得されたそうしたまなざしは、その後の「ぶらほ」の実践史において、より自覚的に反復され、実践の潮流へと発達・集約させられていく。それが「地方都市を考える」とゆるく題され、始まっていった一連のとりくみである。2014年11月から2019年3月まで断続的にとりくまれたものだ<sup>15</sup>。

そのとりくみのうちには、さまざまな内容の事業が含まれる。例えば、それは当初、まち／地域の来歴を体現するようなさまざまな場の実践者をゲストに招いてのトークイベントであったり、地方都市に関するさまざまな文献と一緒に読む読書会であったりしたが、後にそこに実際にそうしたまち／地域の現場を訪ね歩く「まちあるき」が加わっていく。

各企画のなかで語られ、知られ、そして学ばれたことは、そのつど、冊子や地図などの形式でまとめられ、まち／地

域の各所にて無料で頒布された。『地方都市ヤマガタを考える』(2015年)、『ヤマガタの歩きかた』第1～2集(2015・16年)、『まちあるきのススメ』全二巻(2017・18年)、『戌辰之役の歩きかた』(2019年)といった冊子群である。

こうした企画群がそれぞれにテーマ・コミュニティを構成し、若者たちに〈居場所〉を供給してきた。と同時に、そこに参加することで彼(女)らは、「フォーラム」や「山形女専」の場合と同様、現在の自分たちを意味づけてくれるようなまち／地域の文脈と出会っていきのだった。いわばそれは、彼(女)らをまち／地域へと媒介していたのである。

そのようすは、制作された冊子のなかの参加者の語りに垣間見ることができる。例えば、上記の冊子『ヤマガタの歩きかた』第2集には、地方都市・山形のさまざまな場——例えば、「映画祭」やピンク映画館、メイドカフェ、読書会、公園、寺院、空き家やスーパーマーケットなど——に関する参加者たちの社会記述が収録されているが、以下は、参加者Iさん(30代・男性)によるある公園の記述である。

舞鶴山(天童公園)は、天童市の中心部に位置し、その山頂から見える壮観な景色や、見ごたえのある桜で有名です。…(中略)…／再訪した際、私がとりわけ興味を惹かれたのは、明治から昭和にかけて生きた奉仕活動家、「はなかみ先生」こと高橋英雄(えいお)の功績を示す石碑でした。…(中略)…はなをかむという習慣を当時の子どもたちに普及させたことから、「はなかみ先生」と呼ばれています。／知識としては昔から知っており、つつじ公園にも何度も遊びに来たことはあるはずなのですが、石碑を立ち止まってじっくり見たのは初めての経験でした。その場でスマホを使っているいろいろ調べてみると、更におもしろいことがわかってきます。詳述する余裕はありませんが、若き日の高橋は、日本よりもはるかに発達したアメリカの高度な文明に憧れをいだき、アメリカ行きの貨物船にこっそり乗り込んで(!)、学問や芸術にうちこんだ後、二十数年を経て故郷の天童に戻り、アメリカで学んだことを地元を活かそうとさまざまな奉仕活動を始めたそうです。／当時、高橋英雄は何を思い、あれほど憧れたアメリカから舞い戻って故郷に尽くしたのか。日本近代化のさなかに、故郷は高橋の眼にどのように映っていたのか。高橋が一〇〇年近くも前につつじを植えたその場所で、かつての自分は遊び、今また同じ場所にいる…。／そう考えたとき、ふと「歴史」というものと、いまの自分がつな

がったような感覚がありました。高橋がいたころの時代と、私の幼少期の思い出と、そして「いま・ここ」の自分が、一直線に結びついたような感じがしたのです。／…(中略)…／過去の出来事としての「歴史」と「いま・ここ」の自分とのつながりから見えてくる、関係性としての〈歴史〉。「歴史」が〈歴史〉に変わるとき。その感触をつかんだ新鮮な体験でした。(Iさん「舞鶴山から見えた〈歴史〉」『ヤマガタの歩きかた 第2集[試論篇]』pp.14-17)

### (3)新しい〈居場所〉の創出

前項で見た「シネマカルチャーサロン」や「小便小僧プロジェクト」などもそうであったが、「ぶらほ」がまち／地域の社会文化拠点と協働でつくりだしたテーマ・コミュニティは、「ぶらほ」の人びとにとってのみ意味がある〈居場所〉なのではない。それは、「ぶらほ」とは無関係に生きるまち／地域の人びとにとっても意味や求心力をもつことがある。

とりわけ山形のような地方のまち／地域にあって、そこに大都市圏におけるような資源や機会が見当たらなかったとして、〈居場所〉がその代替となるような資源や機会をつくりだしているような場合、その場は強い求心力を宿すことになる。かつての「フォーラム」がそうであり、「ぶらほ」もまたそうした資源や機会をたびたびつくりだしてきた。

ここでは、「ぶらほ」が実際につくりだしてきたそうしたさまざまな機会のうち、代表的ともいえる二つのものを検討したい。すなわち、山形市の中心街で行われている「山形花笠まつり」での花笠音頭パレードへの参加(①)、フリースペースのやりとりから自生的に立ち上がり続けられていったコスプレイベント(②)という二つの機会である。

#### ①花笠音頭パレードへの参加

花笠音頭パレードは、1963年に始まった夏の山形観光イベント「山形花笠まつり」における市民参加型のパレードである。毎年8月5～7日の三日間、山形市内のメインストリートで、花笠をもった踊り手たちがさまざまな団体ごとに踊っていき、それを沿道の人びとが観賞するというものである。そこに参加するには、踊り手の団体に所属する必要がある。

「ぶらほ」は、創設から三年後の2007年より最終年度の2018年に至るまで毎年、イベントが近づく7月ごろより、その界限でゆるく出場者を募り、チームをつくって練習に励み、25～40人でいどの規模で当日のパレードに参加し続けてきた。踊り終わって少し経ったところに打ち上げでしめるまで



がひとまとまりのテーマ・コミュニティである。

「ぶらほ」がこのイベントに参加することになったきっかけは、共同代表兼スタッフの松井が2005年、彼女が参加していた別のサークルでパレードに参加して踊るのを、フリースペースの若者たちが「お出かけ」として見にいったことにある。それが後日、「いつか「ぶらほ」で出場登録をして参加できるようにしたいね」と話題にのぼったのであった。

しかし、当該パレードへの参加には条件があった。それは、最低でも20人は踊り手がいないと登録できないというもので、2005年当時のフリースペースにはそれほど多くの参加メンバーはいなかったため、すぐに参加するのは難しそうだという判断になったのだ。それが、その後のフリースペースの活性化で2007年に可能になったということである。

こうした経緯もあり、当初、この花笠パレードにまつわるテーマ・コミュニティのメンバー、すなわち踊り手となる人びとは専らフリースペースなど「ぶらほ」の活動の参加者から構成されていたのだが、参加の回数が重なっていくにつれ、「ぶらほ」が参加しているのであれば、そのチームに自分も混ぜてほしいという希望が集まるようになる。

先述した通り、パレードに参加するには何らかの踊り手団体に所属していなければならない。踊り手団体の多くは地元企業や地域団体、学生サークルなどである。そうした地縁や社縁に恵まれていなければ、参加の敷居がぐっとあがることになる。「ぶらほ」は敷居の外側にいた人びとに、東の間の所属と参加の機会とを供給したのだった。

加えて、「ぶらほ」のパレード参加にはある特徴があった。というのも、当時のフリースペースでは、コスプレや異性装がメンバーの間で頻繁に話題にのぼり、その機会がまち／地域のなかに探られていたこともあり、参加の際にコスプレや異性装をして踊るというスタイルが採用されるようになっていく。それらもまた独特の引力を産んでいくのである。

花笠パレード参加のこうした事例に見られるように、「ぶらほ」がまち／地域のさまざまな隙間に見出し、新たにつくりだしていった〈居場所〉は、当初は専らフリースペースの若者たちのまち／地域の足場として機能しているのだが、やがてその魅力が周囲に知られるようになると、「ぶらほ」外部の人びとをも惹きつける引力を宿すようになっていく。

前項の「フォーラム」などもそうであったが、そうやってまち／地域とフリースペースの中間領域にうまれた場は、互いに異質であるような二つの世界をゆるやかに媒介し、相

互の交通を促すものとなっていく。以下は、花笠をきっかけに「ぶらほ」につながったとも言えるJさん(40代・女性)の言葉である。

長女が小学生の頃、学年行事で参加した花笠まつりで見かけたのが最初の「ぶらほ」。小さい子ども、女装をしたお兄さん、プリキュアのコスプレをしたおじさん……これは何なんだ!? と強烈に印象に残りました。その後、長女が本格的に不登校になり、日中過ごせる場所をネットで探していたところ、見つけたのがなんと! その「ぶらほ」なのでした。それから、もちろん長女もお世話になりましたが、気がつく私の居場所として、なくてはならないものになっていました。仕事終わりのフリースペースでの松井さんやスタッフのみなさんとおしゃべりに、今まで抱えていた生きづらさがどんどん軽くなっていきました。日によっては、とても重い気持ちで、フリースペースまでの階段を上がってきたのに、いつの間にかお腹を抱えて笑っている自分がいて、とても不思議な力がある場所だと感じていました。(Jさん「長女が不登校をしてくれたこと、そして「ぶらほ」があったこと」「ぶらほ」とは何であったのか? (下)』p.11)

## ②コスプレイベント

これまで度々登場してきたコスプレ——通常は、アニメや漫画のキャラクターに扮することを指すが、「ぶらほ」では仮装や異性装も含めてそう呼ばれていた——だが、それを実践しようとしても、私たちの社会や日常においてそれが可能であるような場は稀である。しばしばそれは世間の規範に抵触するものでもあるため、保守的とされる地方においては一層その傾向が強い。

よってそうした欲望を満たそうとするなら、多くの場合、都市が可能とするような匿名的な場を探すしかない。そうした場として有名なのは、東京ビックサイトでの同人誌即売会「コミックマーケット」であり(霜月2008)、山形の若者たちももちろんそこをめざすわけだが、それと同時に、より身近にそうした場がほしいというニーズはくすぶり続ける。

もちろんコミックマーケットの地方版のようなものは仙台市や山形市でも開かれているが、そうした場もそれほど頻繁にあるわけではない。2010年ころ、フリースペースに集う若者たちの間でそのことが話題にあがり、それなら自分たちで機会をつくらうということになった。かくして、「ぶらほ」の

一連のコスプレ関連企画が始まっていく。

それは、2010年冬から翌年冬まで、夏と冬に「フォーラム」併設のカフェを貸切ってのコスプレパーティとして「ぶらほ」主催で開かれた。スタッフが中心となって開催した3回のパーティの後、「そんなにやりたいなら自分たちで主催してやったら?」ということになり、「ぶらほ」メンバーからなる実行委員形式で継続されていくこととなった。

メンバー自主運営によるコスプレパーティは、「フォーラム」カフェの閉店により、山形市内の公共施設を会場に、2012年夏から翌年冬まで計2回開催され、その後はしばらく休止する。やがて2014年、「ぶらほ」の総合文化祭イベント「ぶらフェス」にて「ぶらほ文化」の一つとして復活し、以後はこの「ぶらフェス」がコスプレの場となっていく。

「ぶらフェス」は、毎年秋に山形市内で公共施設を貸し切り、各部屋に「ぶらほ」のテーマ・コミュニティが陣取り、コミュニティごとにワークショップや展示、講座などを行うというもので、2014年に始まった企画である。2014～15年には廃校活用施設、2016～17年には「ぶらほ」の各拠点において開催された。コスプレはそこで「ぶらほ」の人びとの制服として機能していた。

コスプレの制服化と並行するように、「ぶらほ」のメンバーやスタッフたちは、フリースペースで日常的に行われていた交流会(飲み会)や関連イベント(例えば、LGBT講座など)の際に講師をつとめたスタッフの滝口が異性装を行うなど、さらにはごく普通のフリースペース開設日に「コスプレ日」を設定するなど、それを日常のなかに埋め込んでいった。

このように、日常化しつつ「ぶらほ」のさまざまな場に浸潤していくコスプレのテーマ・コミュニティは、次第に「ぶらほ」外の多彩な人びとも惹きつける引力を獲得していく。例えばそれは、コスプレしたいがその機会が周囲に乏しいというオタク系の若者たち、自身のありのままを隠さずに居られる仲間がほしいというセクマイの人びとなどである。

ここにあるのは、映画や花笠界隈のテーマ・コミュニティで見られたと同じ過程である。それらは、元々はフリースペースの若者たちのためのものとして産み出されたものだが、それがその場に宿していった価値や強度のゆえに、ある意味、普遍的な引力を獲得し、まち／地域のさまざまな人びとに対しても〈居場所〉を供給していくことになったのだった。

この意味で、「ぶらほ」の内／外の境界線は、曖昧で不

安定で、容易に越境可能なものに徐々になっていたのであった。それは、その境界領域に位置するテーマ・コミュニティが内と外をゆるく媒介しているということでもある。フリースペースの周囲にさまざまな〈小さな居場所〉が群立する「ぶらほ」の自己像が、こうして姿を現していくのである。

#### (4) 新しい〈居場所〉どうしのネットワーク化

ここまで、フリースペースを中心に、そこからのびた触手のごとく、さまざまなテーマ・コミュニティが周囲に群生しているような「ぶらほ」のかたちがどんなふう生成してきたかを、「まち／地域の探索」と絡めながら追いかけてきた。「ぶらほ」の実践が契機となり、こうした〈居場所〉や〈居場所っぽい場〉のネットワークが生まれてきたのである。

「ぶらほ」の内／外にまたがって大小さまざまな〈居場所〉が織りなしているこのネットワークは、そのどこかに触れた人びとを内部に絡めとり、活動に巻き込んでいく引力を有する。個々のテーマ・コミュニティが宿すそれに加え、それらの総体もまた独特の引力を発揮しているのである。それを体験したある教育学者(40歳・男性)の証言を引こう。

神戸がすべての始まりだった。ときは2010年9月20日午後。某学会での青少年の「居場所」づくりをめぐる小セッション。私が基調報告を担当していた。そこで山形で若者の「居場所」づくりをしているNPOの代表、と自己紹介したのが滝口さんであった。…(中略)…セッション終了後、名刺交換を行った。私はその前月より山形大学に移ったばかりで、当然のことながら何も知らなかった。／山形に戻るとすぐ滝口さんから、彼が山形大学人文学部に乗り込み担当している「NPO実践力養成講座」へのお誘いがあった。さっそく9月27日の回に参加した。その後も10月10日に開催された雨宮処凛さんと滝口さんとのトークイベント(教職員組合主催)にも参加した。そこで松井さん、東北芸術工科大学のK教授[引用者加筆]と〈愉快なお弟子さんたち〉ともお会いできた。結果、10月14日からはK先生のもとで行われている読書会に参加することになり、現在に至る。ついで、12月1日には滝口・松井両名に私の講義に出講いただき、〈ぶらほ〉の活動を語っていただいた。／こうしてふりかえると、山形に移ってわずか数ヶ月で私は何も知らないをいいことに〈ぶらほ〉を基点としたネットワークの中に「からめとられた」のである。(安藤耕己「からめとられたアッー!」『ぶらっと

---

ほーむクロニクル』p.31)

ところで、このネットワークは、その内側に身を置くと、単なる人／場どうしのつながりの抽象的な線としてのみあるわけではなく、それらをたどって人びとがいろんなコミュニティどうしを往来できる通路としても存在している。人びとはそこを移動しながら、つまみ食いするように自分に何が必要かを探し歩き、〈居場所〉をわたり歩いていく。

「ぶらほ」の探索を発端に生成した、このまち／地域の〈居場所〉のネットワークは、いわばストリート(街路)のように、そこでたちどまり、とどまることも可能であるような公共性や冗長性のある通路である。人びとはそこで自由に思考錯誤を行い、生き先やその速度を「お試し」できる。以下は、利用者の若者Lさん、Mさん(ともに30代・女性)の証言である。

「ぶらほ」に初めて来たころの私は人と接することへの苦手意識が強く、お茶を飲みながらの何気ない世間話でも、大して会話が續かないという状態だった。「ぶらほ」に通うということは人と関わりを持つということで、私が克服したいと思わずと避けてきたことと向き合うことでもあった。「ぶらほ」での時間はその多くが私にとっては試練であり、修行ともいえるものだったように思う。／「ぶらほ」では映画やワークショップなど様々なイベントに出かけて行ったり開催したりしていたので、おそるおそるではあったが、そこに参加することで多種多様な世界と出会うことができた。当時の私は修行などという気持ちで参加していたわけではなく、誘われたし楽しそうだからという理由だけだったのだが。結果的に多くの人や考え方に触れることとなり、初「ぶらほ」の頃よりは人と接するのが苦でなくなった気がする。(まだまだ苦手意識はあるししゃべりは不得意だけれど。)(Lさん「これからも修業は続く」『「ぶらほ」とは何であったのか?(中)』p.01)

とある研究会の分科会ではじめて会ったときに「書評、書いてみませんか?」と誘われ、自分の能力を公共のために役立てられるのであれば、それはすごいことかもしれない!とホイホイついていったのが運のつき。次から次へと書評や文章を書かされ、あれよあれよと赤眼鏡[引用者註:筆者のこと]におだてられて木に登るうち、いつの間にか、いろんなプロジェクトに巻き込まれ、気づけば〈ぶらほ〉は、自分にとって大事な“居場所”になってしま

---

た。(Mさん「おだてられて木に登る」『ぶらほの使いかた! ぶらっとほーむ入門2014 第3集』p.15)

このように、「ぶらほ」は、そのフリースペースをひとつの基点に、その内／外の境界線を越えて〈居場所〉のネットワークをつくりだし、それを地下茎のようにまち／地域にはりめぐらせていった。人びとは、そうした環境に「巻き込まれる」なか、いつの間にかさまざまな資源や足場を手に入れ、まち／地域に自らの〈居場所〉を見出していったのである。

---

## 5. 〈居場所〉を増やすとはどういうことか

前章で見た「ぶらほ」の実践とは、自分たちにとって意味のある資源や足場をまち／地域のなかに具体的に見出したり、ときに新設したりしつつ、それらを相互につなぎあわせ、「〈私たち〉の場所」(パーパー1998=2007)をつくりだしていくものだった。〈居場所のなさ〉を感じる人びとは、それらを手がかりに、寄る辺なきまち／地域に生きる縁(よすが)を得ていくのである。

これは、周囲にある既存の環境を「自分たちにとって意味のあるもの」につくりかえていくことを意味する。生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルは、生物主体のそれぞれが環境のなかの諸物に意味を与えて構築している世界のことを「環世界umwelt」と呼んだ(ユクスキュル／クリサート1934—1970=2005)。〈居場所〉を増やすとは、この「環世界」へのアプローチを意味する。

どういうことか。〈居場所づくり〉とは、既存のまち／地域が構築し規範化してきた「環世界」のありようから漏れ出た人びとに居られる場を供給する営みであった。そこでは、そこに身をおいた人びとのつぶやき、すなわち、彼(女)らがまち／地域に求める意味を拾い集めながら、「来るべき環世界」に向けて既存のそれが再編されていた。

この再編の結果、それに触れた人びとにとって、自分たちをとりまいているまち／地域は、自分たちと無関連に構成されている客観的な存在から、自分たちにとって意味のある「〈私たち〉の場所」へとその位置づけを変容させていくようになる。前章の「ぶらほ」の実践とは、そうした「環世界」の再構築に照準するアプローチと解釈しうる。

では、こうした下からの「環世界」再編とその支援とは、そうした〈居場所づくり〉を擁するまち／地域にとってどんな意

味をもっているのだろうか。とりわけ、そうした営みが相対的に稀少である地方——さらに言うと、稀少ではあるにせよ、かろうじて存在はしている地方都市——において、〈居場所〉を増やすという実践が意味しているのは何だろう。

上記の「環世界」の再編とは、人文地理学(レルフ1976=1991→1999)や都市社会学(吉原・堀田2015a;2015b,吉原2018)などで「空間から場所へ」と呼ばれる近年の動向とも重なるものである。これは、1960年代からの郊外化、90年代からのグローバル化により、人びとの生業や生活の拠点となってきた場所が、特定の役割や機能を期待される抽象的・客観的な空間へと置き換えられてきたことへの対抗現象である。

しかしながら、人びとが「自分たちにとっての意味」をさまざまにそこから引き出しつつ生きていた多義的な場所を、効率や速度のために一義的で機能的な空間に置換していくという「場所から空間へ」の動きがそれによって滞っているというわけではない。その強さゆえにこそ、それへの斥力として「場所へ」のニーズが活性化しているともいえる。

そして現在、そうした過程の「先端」にあるのが地方都市である。貞包(2015)は、「ぶらほ」がその実践のフィールドとしてきた山形市を素材に、地方都市の現在を、資本のメカニズムが浸潤する最先端——「消費社会」の先端——として描き出す。それは「空間へ」によって、地方に暮らす人びとのニーズをかなえようとするひとつのありかたである。

実際にそれは、貞包が実証的に論じているように、地方の人びとにさまざまな選択肢を供給するものであった。例えば、身近にあるロードサイドやショッピングモールなどに足を運べば、そこで大都市とさほど遜色のない消費社会の快楽や利便さを享受できる。いわばそこでは、消費社会の浸潤によって「都市への権利」(ルフェーブル1968=1969→2011)が保障されているのである。

しかし、それらには限界もあり、あくまで疑似解決にとどまる。ロードサイドやショッピングモールが供給しうる選択肢の多様性には限りがあり、当然ながら貨幣がなければ都市や消費へのニーズは満たされない。それが不満なら、その土地を離れ、より大きな規模の都市をめざすということになる。しかし、近年の貧困化はそれを困難にしつつある

結果、地方にありながら——そこにとどまらざるを得ないながらも——欲望を断念することなく、既存の選択肢群

の外部を求めるといふ人びとの動きが存在感を増しつつある。例えば、滝口(2018)は山形県内でそうした——新たな選択肢を求め、つくりだしている——若者たち50人の実践現場を訪ね歩き、そのありようを記録したものである。

ゼロ年代以降、格差・貧困がじわじわ拡大し、とりわけそれが地方に暮らす人びとを直撃していることから、希望に反し、地元への滞留とそこでの選択肢探しを選ばせざるをえない者たちも増えている。昨今は「ローカル」がブームともなっているが、上記のような若者たちの開き直った現状肯定こそが、その熱源となっているようにも思われる。

ところでそうした開き直り——地元とその価値の捉え返し——は、その人びとの内で自然に起こるものでもないだろう。そうした意識変容にはそれを可能にしてくれるような何らかの場が必要と思われる。その場こそ、本稿がこれまで論じてきた〈居場所づくり〉であり、それらを増やしていくことが地方でこそ急務となっているのはそのためであった。

そう考えると、〈居場所づくり〉とは、資本が「消費社会」として行っているのとは異なるやりかたで、地方の人びと——「都市への権利」を求め人びと——にそれを保障しようとする試みであったと言える。〈居場所づくり〉が市民社会に基盤を置く実践であることを鑑みるなら、それは、市民社会による地方の「環世界」再編とまとめることができよう。

それは、「ぶらほ」の事例において確認してきたように、他所で排除の憂き目にあってきたような人びともゆるやかに包摂しつつ、そこに身を寄せた人びとの「困りごと」のつぶやきを拾い集め、それらが解決される資源や足場の実装に向けた試行錯誤を、周囲をもやわらかく巻き込みながら行うという実践の方法であった。

そうした〈居場所づくり〉実践が地方都市に存在し、さらに多彩な〈居場所〉をその周囲に増やしていくということは、地方の人びとにとって、大都市の代替となる選択肢の多様性を、市場や資本とはまた別に、自分たち自身が関与可能なかたちで手に入れられるようになるということである。これこそが、地方都市における〈居場所づくり〉の意義であった。

## 6. おわりに

「ぶらほ」が行っていた〈居場所〉を増やす実践の内容とその意味について検討・考察してきた。それは、とりわけ地方において顕著であるような〈居場所〉の乏しさという課題に対し、まち／地域のなかに〈居場所〉やその機能的代替物を増殖させていくという独自のとりくみによりその解決を図ろうとするものであった。

その達成は、それが特段の資金や権力をもたずとも可能であるような「弱者の戦略」として成り立ってきた点にある。「ぶらほ」はそうした実践を、さしたる資金や権力の持ち合わせもないまま、必要な資源をそのつどまち／地域のなかに見出し、現地調達していくようなやりかたで成立させていった。

こうしたブリコラージュ（器用仕事）は、ある意味、資源に乏しい地方だからこそその発想であり方法であると言えるかもしれない。そもそもが支援のための資源が身近にたくさん存在しているなら、その外部にわざわざ〈居場所っぽい場〉を探していくような解釈実践は生じようがない。「課題先進地」だからこそ、そうした発想や方法が生成しえたのだった。

ところで、そこには課題もある。資源の稀少さをさまざまな解釈で埋め合わせ、〈居場所〉の代替物をまち／地域に増やしていくというようなことが可能となるためには、そのまち／地域に、〈居場所っぽさ〉をそこに読み込みうるような何らかの資源が、少ないながらもあてどの量と質とで存在していなくてはならない。

この条件を満たしうるのは、地方のなかでも比較的人口や資源に恵まれた地方都市までであろう。「ぶらほ」が活動の拠点を置いていた山形市は、人口25万人規模の都市である。より規模の小さな都市、さらには市部から隔たった郡部や町村部においては、〈居場所〉をそこに結晶化していくための、核となる資源さえ、調達は容易でないかもしれない。

もちろんこうした課題に対しても、「ぶらほ」はその実践史において直面し、その乗り越えのための試行錯誤を経験していた。都市部以外のまち／地域へも〈居場所〉を遍在させていくような「ぶらほ」の——そしてその解散後は後継となるNPO「クローバーの会@やまがた」の——とりくみについては、ここで論じる余裕がないため、別稿を期したい。

さて、ここまで「ぶらほ」というローカルな一事例をもとに検討・考察を重ねてきたが、それらはどれほど普遍化可能なものであろうか。「ぶらほ」の事例検討から明らかになったことは、社会モデルの観点から観たときの〈居場所づくり〉の多彩な意味である。そこでは、単なる個人的なケアのみならず、人びとをとりまく環境の改変さえもが、その実践を通じて試みられていた。

そうした多彩な意味や機能は、「ぶらほ」という〈居場所づくり〉だけが産み育てていたものではない。同じようなまなざしを以てすれば、他のさまざまな〈居場所づくり〉実践においても、さまざまな工夫や方法で〈居場所〉を増やすための諸実践がとりくまれているのを発見し観察することができるだろう。

そこにはきっと、それぞれのローカルな文脈に応じてさまざまなかたちで花開いた、〈居場所〉を増やす〈居場所づくり〉の多彩な実践が姿を現わすことであろう。これまでの個人モデルへの立脚によっては十分に光があたってこなかったそれらに新たな光をあてること。社会モデルとは、そうした光を投じるための欠かすことのできない視点なのである。

## 参考文献

- 朝倉景樹(1995)『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社。
- 池上正樹(2019)『ルポ「8050問題」:高齢親子“ひきこもり死”の現場から』河出書房新社。
- 石川准・長瀬修[編](1999)『障害学への招待』明石書店。
- 石川准・倉本智明[編](2002)『障害学の主張』明石書店。
- 石川良子(2003)「パッシングとしての〈ひきこもり〉」『ソシオロジ』48(2)、39-55頁。
- (2007)『ひきこもりの〈ゴール〉:「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社。
- (2016)「「ひきこもり」からの問題提起」好井裕明編『新版排除と差別の社会学』有斐閣、93-113頁。
- 上野千鶴子(2011)『ケアの社会学:当事者主権の福祉社会へ』太田出版。
- うてつあきこ(2009)『つながりゆりりと:小さな居場所「サロン・カフェ」もれび』の挑戦』自然食通信社。
- NPO法人フリースクール全国ネットワーク編(2009)『フリースクールボクらの居場所はここにある!』東京シュレー出版。
- 荻野達史(2013)『ひきこもり もう一度、人を好きになる:仙台「わたげ」、あそびとかかわりのエスノグラフィー』明石書店。
- 荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎[編](2008)『「ひきこもり」への社会的アプローチ:メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房。
- 御旅屋達(2015)「居場所:個人と空間の現代的関係」本田由紀編『現代社会論:社会学で探る私たちの生き方』有斐閣、131-153頁。
- レイ・オルデンバーグ(1989=2013)『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房。
- 川北稔(2019)『8050問題の深層:「限界家族」をどう救うか』NHK出版。
- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子[編](2019)『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房。
- 菊池まゆみ(2015)『「藤里方式」が止まらない:弱小社協が始めたひきこもり支援が日本を変えられる可能性?』萌書房。
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美(2016)『質的社会調査の方法:他者の合理性の理解社会学』有斐閣。
- 北川慧一・古賀大己・澤路毅彦(2017)『非正規クライシス』朝日新聞出版。
- 貴戸理恵(2005)「不登校の子どもの「居場所」を運営する人びと——それでも「学校に行かなくていい」と言いつづけるために」『現代のエスプリ』457号: 164-174。
- 熊谷晋一郎(2020)『当事者研究:等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店。
- 熊沢誠(2006)『若者が働くとき:「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房。
- (2007)『格差社会ニッポンで働くということ:雇用と労働のゆくえをみつめて』岩波書店。
- (2018)『過労死・過労自殺の現代史:働きすぎに斃れる人たち』岩波書店。
- 今野晴貴(2012)『ブラック企業:日本を食いつぶす妖怪』文春新書。

- (2015)『ブラック企業2:「虐待型管理」の真相』文春新書。
- 齋藤純一(2000)『公共性』岩波書店。
- 斎藤環(1998)『社会的ひきこもり』PHP研究所。
- (2020)『中高年ひきこもり』幻冬舎。
- 斉藤道雄(2002)『悩む力:べての家の人びと』みすず書房。
- (2010)『治りませんように:べての家のいま』みすず書房。
- 貞包英之(2015)『地方都市を考える:「消費社会」の先端から』花伝社。
- 澤村明(2006)『草の根NPOの運営術』ひつじ書房。
- 霜月たかなか(2008)『コミックマーケット創世記』朝日新聞出版。
- 『社会文化研究』編集委員会[編](2015)『社会文化研究』第17号、晃洋書房。
- 砂川秀樹(2015)『新宿二丁目の文化人類学:ゲイ・コミュニティから都市をまなごす』太郎次郎エディタス。
- 滝口克典(2017)「「ぶらほ」の奇妙な実践:支援の社会モデルより」『月間社会教育』737号、34-38頁。
- (2018)『若者たちはヤマガタで何を企んでいるか?:ポスト3.11の小さな革命者たちの記録』書肆犀。
- 田中康裕(2019)『まちの居場所、施設ではなく:どうつくり、運営、継承されるか』水曜社。
- 東畑開人(2019)『居るのはつらいよ:ケアとセラピーについての覚書』医学書院。
- 中村かれん(2014)『クレイジー・イン・ジャパン:べての家のエスノグラフィ』医学書院。
- 中村智志(2017)『命のまもりびと:秋田の自殺を半減させた男』新潮社。
- 日本建築学会[編](2010)『まちの居場所:まちの居場所をみつめる／つくる』東洋書店。
- [編](2019)『まちの居場所:ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会。
- ベンジャミン・R・バーバー[山口晃訳](1998=2007)『〈私たち〉の場所:消費社会から市民社会をとりもどす』慶應義塾大学出版会。
- 藤里町社会福祉協議会・秋田魁新報社編(2012)『ひきこもり 町おこしに発つ』秋田魁新報社。
- 藤田孝典(2019)『中高年ひきこもり:社会問題を背負わされた人たち』扶桑社。
- 南出吉祥(2015)「『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質」『社会文化研究』17号、69-90頁。
- 柳下換・高橋寛人編(2011)『居場所づくりの原動力:子ども・若者と生きる、つくる、考える』松籟社。
- ユクスキュル／クリサート[日高敏隆・羽田節子訳](1934—1970=2005)『生物から見た世界』岩波書店。
- 横川和夫(2003)『降りていく生き方:「べての家」が歩む、もうひとつの道』太郎次郎社。
- 吉原直樹(2018)『都市社会学:歴史・思想・コミュニティ』東京大学出版会。
- 吉原直樹・堀田泉[編](2015a)『交響する空間と場所I 開かれた都市空間』法政大学出版会。

——— [編] (2015b) 『交響する空間と場所Ⅱ 創られた都市空間』法政大学出版会。  
アン・ルフェーブル [森本和夫訳] (1968=1969→2011) 『都市への権利』筑摩書房。  
エドワード・レルフ (1976=1991→1999) 『場所の現象学: 没場所性を越えて』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳、筑摩書房。

[引用資料] ※直接言及・引用したもののみ

ぶらっとほーむ編『ぶらっとほーむ通信』(12号までB5判、以後A5判、12頁、毎月発行、2003年4月～2019年8月、通算193号)  
——— 編 (2006) 『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門』(B5判、40頁)  
——— 編 (2007) 『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門2007』(B5判、48頁)  
——— 編 (2009) 『居場所の歩きかた: やまがた「不登校・ひきこもり」支援NPOガイドブック』(A5判、128頁)  
——— 編 (2010) 『地域のつくりかた!: やまがたの若者たちの地域づくりインタビュー情報誌』(A5判、144頁)  
——— 編 (2013) 『ぶらっとほーむクロニクル2003-2013』(B5判、41頁)  
——— 編 (2015) 『ぶらっとほーむ入門2014 第3集 ぶらほの使いかた!』(A5判、40頁)  
——— 編 (2019) 『「ぶらほ」とは何であったのか?』(上・中・下巻、A5判、各29～30頁)  
「ひまひま」編集部編 (2015) 『別冊ひまひま01 地方都市ヤマガタを考える』(A5判、40頁)  
『ヤマガタの歩きかた』編集部編 (2015) 『ヤマガタの歩きかた 第1集 [書籍篇]』(A5判、40頁)  
——— 編 (2016) 『ヤマガタの歩きかた 第2集 [試論篇]』(A5判、40頁)

- 1 本稿では、実践現場で生成した語彙が概念化され、それを研究の文脈でも踏襲して用いるような場合、その概念を〈 〉で表記している。具体的には、〈居場所〉〈居場所のなさ〉〈居場所づくり〉〈ことば〉などがそれにあたる。
- 2 例えば、社会文化学会の学会誌『社会文化研究』第17号では「〈場〉をつくるということ」という特集が組まれている(『社会文化研究』編集委員会2015)。後述の南出(2015)はそれに寄せられた筆頭論文である。
- 3 「若者支援」や「社会教育」の実践家や研究者からは、〈居場所づくり〉実践の現状が「居場所のインフレ」などとネガティブなニュアンスで語られることも多い。
- 4 公刊されているものについては、基本的に、山形県立図書館や山形市立図書館などで閲覧することができる。公刊されていないもの、例えば、「ぶらほ」の個々の実践に関する作業ファイルや報告文書、スタッフが用いていた活動ノートなどは、2020年現

在、それらのアーカイブを継承した「ぶらほ」の後継NPO「よみち文庫」(2019年9月設立)が管理している。

- 5 2003～2012年度のあいだは山形市江南、2013年度以降は山形市緑町に拠点をかまえて活動していた。NPO会員は2003年度から10年ほどは2名(この二人がNPO会員、同運営委員ならびに共同代表をつとめる)であったが、2013年度以降は10名でいととなる。この会員の人数とがさまざまなかたちで活動を担うスタッフ(有償・無償)となっていた。
- 6 山形市東山形で活動していた不登校支援NPO「フリースペースSORA」(2001年創設、2013年4月より「フリースクールSORA」と改称、翌年春に解散)、同市小荷駄町で活動していたNPO「発達支援研究センター」(2002年創設)の二か所である。筆者と松井は2001-02年度にかけ前者で活動しており、そこを離れて2003年度より開始したのが「ぶらほ」の活動ということになる。
- 7 テーマ・コミュニティのより詳細な記述と分析については、滝口(2017)を参照。
- 8 例えば、2009年には、山形県内の「不登校・ひきこもり支援をうたうNPO・市民活動12団体の活動現場を訪れ、その代表者に対するインタビュー調査を行った。その内容をまとめたものが、ぶらほ(2009)。このように「ぶらほ」は、実際に県内に存在する民間支援団体の悉皆調査を通じて各団体とつながり、それぞれがどんな価値観や考えかたに基づいて支援実践を行っているかを把握したうえで、若者たちの求めや必要に応じて情報提供を行うとともに、ときにそれらへと彼(女)らを媒介していった。
- 9 以下の記述は、特に説明がない限りは、『ぶらほ通信』の記述や当時の各事業の作業ノート、事業報告書などをもとに再構成したものである。
- 10 『ぶらほ通信』では、必ず前月のフリースペースや各種テーマ・コミュニティにおける活動内容が紹介されており、そこにどこに「お出かけ」したかの記述がある。行き先の決定は、当初はスタッフ側の提案に利用者が同意するかたちで決まることが多かったが、次第に、フリースペースでの雑談やおしゃべりの話題から行き先の案が採用されるようになっていった。
- 11 2008年2月に地域ユニオンとの協働で行われた「模擬労働相談」のワークショップをさす。
- 12 2010年4月に東北芸術工科大学のチュートリアル の学生たちと協働で行われたアートワークショップを指す。
- 13 現在は、山形市にある「フォーラム」(山形市香澄町)と「ソラリス」(山形市城南町)のほか、福島市、盛岡市、仙台市、八戸市、那須塩原市、東根市と、東北各地の地方都市において全10館・49スクリーンの映画館を展開している。これが「フォーラムシネマネットワーク」であり、そのはじまりの場所が山形市の「フォーラム」である。
- 14 例えば、フォーラムは毎月『フォーラム通信』という上映作品紹介のフリーペーパーを発行しており、まち／地域のさまざまな場所で入手可能である。フォーラムグループ以外の映画館も同様のメディアをまち／地域に流通させており、さらにはさまざまな団体が自主上映など映画関連イベントを頻繁に行っているためそのチラシなども豊富に流通しており、山形市ならびにその周辺地域で暮らす人びとにとって、映画文化は、特に意識せず

---

とも視界に入ってくるような日常の一部となっている。

- 15 「地方都市を考える」の一連のとりくみは、山形大学准教授（当時）であった社会学者・貞包英之さんの提案と協力により行われ、その後も続いていったものである。